

温泉保養地文学としての漱石『明暗』

——ツルゲーネフとヘンリー・ジェイムズの系譜に重ねて——

小鹿原敏夫

一．はじめに

『明暗』は大正五年（1916）五月より朝日新聞に連載されていたが、同年十二月九日、漱石の死によって未完に終わった。漱石の体調悪化のために、最終回（百八十八章）を執筆したのは十一月二十一日であった。最終回の朝日新聞への掲載は大正五年十二月十四日であった。しかし漱石は十一月十六日付の成瀬正一宛書簡で「『明暗』は」来年迄つゞくでせう」と記しているので、完結まであと三十〜四十回ぐらいは必要と考えていたようだ。

一章から百六十七章までは、津田由雄とお延という新婚夫婦の東京における生活を描いている。この二人は目立った問題があるわけではないが、お互いに上手くいっていないと感じている。そんなある日、津田は東京の医院で二度目の痔疾の手術を受ける。

百六十八章からは舞台が移る。退院した津田は手術後の療養を口実に、ある温泉宿に単身出かける。これは津田に大きな影響力を持つ吉川夫人の提案であった。津田はお延と結婚する前

の恋人であった清子に未練を抱いていた。しかし清子は何の説明もなく津田を去り、閑という別の男と結婚してしまったのであった。津田に清子を紹介したのも、その後お延との縁談を調べたのも吉川夫人である。吉川夫人は、そんな津田の感情を見抜き、ある温泉宿に行けば、流産の療養中である清子に会えると津田に告げ、旅費まで都合してやる。

津田の痔疾は肉体の病気であるとともに、心の病気の比喩のようである。第一章で医者には津田に思い切った手術の必要性を説いて以下の様に語る。

たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上りこはないから、今度は治療法を変へて根本的の手術を一思ひに遣るより外に仕方がありませんね。『明暗』一）

しかも医者は、津田の痔疾は結核性のものではないので治療可能であることを断言する。

また吉川夫人は津田にとって夫婦間の問題はかつての恋人であった清子に執着を断ち切れないことにあると看破し、その根本的な治療を薦める。

詰り其方は枝で、根は別にあるんだから、私は根から先へ療治した方が遥かに有効だと思ふんです。でないと今度のやうな行違が又屹度出てきますよ。『明暗』百三十四)

そして温泉旅館で津田と再会した清子は、最初、当惑した様子を見せる。しかしその翌日、清子は津田に対して誘うような曖昧な態度を取る。しかしまさにその場面で小説は中断されてしまった。

『明暗』という未完の作品を考察するということは、漱石が構想していた小説の終末を予想せざるを得ない。筆者は『明暗』の主題はエゴイストの運命であったと考える。そしてその構想に同時代の西洋で流行した「温泉保養地文学」が影響していると考える。

二、『明暗』と「弱いエゴイスト」について

『明暗』はそれまでの漱石の小説作品と比べると登場人物の心理描写に多くを割き、全体にスローモーションの映画を見ているような印象を受ける。時に登場人物の会話はその裏側の心理が微に入り細に入り描写される。

確かに心理描写に力を入れているという特色はあるが、『明暗』は漱石初期の作品『虞美人草』(1907)と同じく身勝手な人物(エゴイスト)の運命を描いている。『虞美人草』のモデルとなったのはメレディスの小説『エゴイスト』(1879)であった。

メレディス作品中のエゴイストはウィロビー・パターンという貴族で、身勝手ではあるものの、周囲の人々に影響されやす

い「弱いエゴイスト」であった。ところが漱石は『虞美人草』の藤尾という女性のエゴイストを「強いエゴイスト」に造形した。藤尾は自己の恋愛を成就するために、小野の許嫁(小夜子)の立場を完全に無視する強いエゴイストである。そして遂にはその報いで自身の死を招く。本来メレディスの『エゴイスト』は「弱いエゴイスト」を描くモリエールの喜劇であったのに、「強いエゴイスト」を登場させたことで『虞美人草』は悲劇になつてしまった⁽¹⁾。

ところが『明暗』の津田は、お延、吉川夫人、お清、そして妹のお秀といった女性たちに翻弄され、経済的には京都の父親に頼っている「弱いエゴイスト」である。このようにして漱石は『明暗』においてはメレディス作品に近似させ、最終的には喜劇にしようとしていたと筆者は考える。

メレディスの『エゴイスト』の書きに、ウィロビーの墓碑銘は「自己を愛するあまりに自分自身を殺してしまつた」とするべきだという言葉がある⁽²⁾。しかし、小説のなかでウィロビーが死ぬことはない。そのかわりエゴイストとしてのウィロビーは最終的に敗北し、意中の女性クララとの結婚をあきらめ、愛のない打算的な結婚として別の女性(ラエティティア)との結婚を受け入れざるを得なくなった。その意味で「エゴイストの死」という表現をメレディスは使つたと思われる。

『明暗』(百八十章)にも墓碑銘が出てくる。温泉旅館に到着した津田は白い髪を生やした書家が滞在していることに気づく。そして宿の者にこの書家は墓碑銘を書くために滞在していると告げられる。この書家が書いている墓碑銘とは、エゴイストとしての津田の死を刻む墓碑銘を示唆していたのではなかつ

たか。

英文学と『明暗』との関連ではゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』(1766)も見逃せない。漱石は同書の英語の原書だけでなくフランス語訳も所有していた。この小説では悪役である大地主ソーントン家の若旦那が、結婚を餌に次々と若い女性を誘拐する。しかし実は偽の聖職者を使って結婚を偽装することで、重婚罪を免れようとしていた。ウェイクフィールド牧師の長女であるオリヴィアもその犠牲になってしまった。しかし実は、若旦那は手下に裏切られ、オリヴィアとだけとは正式の結婚を交わしていたことが明らかになる。その結果、若旦那が合法的に結婚しなかった資産家の娘(ウィルモット嬢)との結婚が無効になってしまふ。このようにソーントンの若旦那も自己本位であるが、詰め甘いところがある「弱いエゴイスト」であった。

しかし著者ゴールドスミスは、そんなソーントンの若旦那にも罪を償った後、オリヴィアとの幸福な結婚生活の可能性を残して小説を終えている。この終章にみられる二人の和解の可能性は、漱石にとって未完の『明暗』の結末で津田とお延の和解が実現し、結婚生活のやり直しの可能性を構想させるヒントにならなかっただろうか。

またウェイクフィールドの牧師であるプリムローズ博士は性善説の人である。結婚に関しても一言言っており、神の御導きで一度結婚を誓い合った夫婦はあくまで一夫一婦制を順守することを主張する。つまりたとえパートナーに先立たれても再婚すべきではないという信念を持っていた。さらにできるだけ多くの子どもを産み、正しく育てることも夫婦の義務と考えて

いた。このような結婚に対する極端に保守的な論考をプリムローズ博士はいくつか出版したが、「幸せな少数の読者」(the happy few)を省けばほとんど読まれなかったこと¹¹⁾ほしている。メレディスのウィロビー・パターンとゴールドスミスのソーントンの若旦那はどちらも人も羨む容貌を持ち、教養ある資産家のお坊ちゃんである。女性に好かれることは言うまでもない。『明暗』の津田は資産家ではないが同じタイプの人物といえよう。

三、漱石と温泉保養地文学

さて『明暗』には「弱いエゴイスト」の系譜に繋がるという以外に、別の西洋文学からの大きな影響があると考えられる。それは十九世紀から二十世紀にかけてのヨーロッパで盛んに読まれた「温泉保養地文学」¹²⁾との関連である。

漱石は初期の作品『草枕』(1906)において人里離れた温泉保養地を舞台に、青年画家が謎の美女と出会う物語を絵画的に描いた。『草枕』の温泉地は現実の場所というよりも中国的な桃源郷を表現しているようだ。

英文学では十九世紀初頭、ジェーン・オースティンが小説『ノーサンガー・アビー』(1803)と『説得』(1817)において温泉保養地バースを重要な社交場として描いている。オースティン作品における保養地バースは上流階級の節度ある社交場として描かれている。

ところが十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて大陸ヨーロッパで流行した「温泉保養地文学」ではこれら温泉保養地は、

ギャンブルと自由恋愛の悪徳の場所として描かれることが多い。漱石は前者ではなく後者をイメーজして『明暗』の構想をつくったのではないかと考えられる。

胃腸の弱かった漱石はヨーロッパの温泉保養地を訪ねる機会を持たなかったが、英国に留学していた時からカールスバード（ボヘミアの温泉地）の鉱泉水を服用していた⁵⁵。また日本に帰国してからたびたび転地療法として温泉保養地に滞在した。

明治四十三年（1910）八月、漱石は、胃潰瘍の転地療養に出かけた修善寺温泉で、病状が悪化し一時は人事不省に陥った。幸いなことに一命をとりとめた漱石は、その翌年の明治四十四年に小品『手紙』（明治四十四年七月『東京朝日新聞』）を発表する。

漱石は『手紙』の冒頭で二人のフランス人作家、ギー・ド・モーパーッサン（1840～1902）の『私の二十五日間』とマルセル・プレヴオー（1840～1941）の『不在』という小説を紹介している。漱石がこの二作品を『手紙』の冒頭に導入した第一の意図は、両作ともに他人の手紙（または手記）を偶然に見するという内容がこれから語られる『手紙』という小説と共通する部分があったからである。しかし第二の意図として同時代の森鷗外の作品を意識していた可能性がある。

漱石の『手紙』が発表される直前、森鷗外が『藤柄絵』（明治四十四年五月・六月『三田文学』）という短編を発表している。

鷗外は『藤柄絵』の冒頭でフランス語の「アワンチュール（aventure）」を説明するのに、二人のフランス人作家、モーパ

ッサンとテオフィル・ゴーチエ（1811～1872）、の作品を紹介している。両作品とも情熱的な人物が、パリを舞台に偶然の出会いを通じて「アワンチュール」（恋の冒険）を体験しようとする小説である。鷗外は作品名を明示していないが、モーパッサンは明らかに短篇『パリのアワンチュール』（Une aventure parisienne 1881）である。ゴーチエの方は長編『モーパン嬢』（Mademoiselle de Maupin 1835）の青年詩人ダルベール（第一章）が出典ではないかと思われる。

しかし、漱石が『手紙』で挙げたモーパッサンの『私の二十五日間』（Mes vingt-cinq jours 1885）とプレヴオーの『不在』（L'Absence 1910）の舞台は、いずれもパリではなく、温泉保養地であることに注目したい。

モーパッサンの作品『私の二十五日間』ではフランス中央部ピュイ・ド・ドーム県の温泉ホテルが舞台であり、プレヴオーの『不在』はドイツのとある保養地が舞台である。漱石はアヴァンチュールの舞台はパリよりも温泉保養地がふさわしいと考えていたようだ。

十九世紀中葉から二十世紀初頭、ヨーロッパ大陸の著名な温泉保養地の多くは、カールスバートを含むオーストリア東部のボヘミア地方から、西は「黒い森」の広がるドイツ南西部を経由してフランス南部にまで点在していた。特に有名で、多くの小説の舞台にもなったのはドイツ南西部のバーデン・バーデン（Baden Baden）とホンブルク（Homburg）であった。両都市は交通機関の発達、ブルジョア層の台頭により、十九世紀中期にはドイツのみならず、イギリス、フランス、ロシアなどから様々な人々が集う国際的な保養都市として賑わった。そこには

温泉施設だけでなく、プロムナードがありカジノがあり、高級ホテルやレストランがあり、オペラハウスがあった。つまり有閑階級にとって健康増進の場であっただけでなく、総合的な社交の場でもあった。

当然、陽の当たる場面があれば暗部もあった。ギャンブルで身を持ち崩した男たち、アワンチュウル目当てに訪れる観光客、カジノや街頭にたむろする娼婦たち、そして遠くの国から流れてきた政治亡命者の姿も稀ではなかった。別の言い方をすれば「温泉保養地」は不道德者の巢窟という評判もその大きな魅力であった。

バーデン・バーデンは王侯貴族から亡命革命家まで特に多くのロシア人が滞在していた。これは同地出身の伯女（エリザヴェータ）がロシア皇帝アレクサンドラ一世（在位1801～1825）に嫁いだこともその理由の一つであった。ドストエフスキーの短篇『賭博者』（1866）はルーレットに耽溺して身を滅ぼしていく男を描いているが、これはドストエフスキーが実際にバーデン・バーデンとホンブルクを訪れた体験に基づいている。

同じくロシア人作家のツルゲーネフは一八六三年から七年間バーデン・バーデンに居を定め、同地のロシア人文芸サークルの中心となった。そんなツルゲーネフが執筆した『煙』（1867）は温泉保養地文学といわれる作品群のなかでの典型でもあり、最高傑作といわれている。日本でも『煙』は英訳本を通じて良く知られていた。漱石もコンスタンス・ガーネット女史が訳した英訳本（Smoke 1906）を所蔵していた。漱石の日記（明治四十三年七月五日）によると石川啄木が同書を借りるために来訪したと記されている。そのころ啄木は東京朝日新聞の校正係

をしながら文筆活動をしていた。

ツルゲーネフを高く評価していた漱石が『明暗』を執筆中にこの作品を意識しなかったことは考えられないだろう。

四．ツルゲーネフ『煙』について

ツルゲーネフの『煙』の梗概を紹介しよう。

① 舞台はモスクワである。青年リトヴィノフは没落貴族の美しい娘イリーナと相思相愛の仲であった。しかしある日、イリーナは初めて貴族階級が集う舞踏会に招待される。彼女は舞踏会に参加することをためらう。リトヴィノフが望むのなら参加しないとまでいうが、リトヴィノフは、イリーナが舞踏会に行くことを認めた。イリーナはこの舞踏会に参加することによって自分は上流階級に仲間入りし、結果として家族を経済的に救うことができることを予感していたようだ。それは当然、リトヴィノフとの別離を意味すると理解していたのだ。実際イリーナは舞踏会での成功のおかげでペテルスベルクの裕福な親戚に預けられることになる。そしてイリーナの家族はその恩恵で困窮した状況を脱した。しかしイリーナはリトヴィノフと別れることとなった。傷心のリトヴィノフは大学を中退して故郷に戻る。

② 舞台は十年後の温泉保養地バーデン・バーデンである。リトヴィノフは父親の農場経営を手伝って実績をあげていた。そして今の彼には許嫁のタチアナがいた。叔母とともに旅をしているタチアナは数日後にリトヴィノフと

バーデン・バーデンで合流する予定であった。バーデン・バーデンには様々なロシア人がいた。そしてその地でイリーナとリトヴィノフは再会する。彼女はロシア人のエリート軍人ラトミロフ將軍の妻で、社交界の華となっていた。彼らのような上流のロシア人はお互いにフランス語で会話するのが習慣であった。そんなイリーナはリトヴィノフとの逢瀬を求め、彼の心を奪ってしまう。イリーナの周りにはかつて前途を有望視されていた官僚であったポツギンがいた。彼はイリーナを愛してしまったことで、前途洋々であったキャリアを棒に振ってしまったのだ。ポツギンは、このままイリーナとの関係を続ければ招来するに違いないリトヴィノフの不幸な未来を暗示しているようだ。

③ リトヴィノフは煩悶の末、タチアナに婚約破棄を伝える。タチアナは深く傷つくが、おとなしく身を引く。リトヴィノフはイリーナとの恋愛を成就するために駆け落ちを決心するが、イリーナはその提案を受け入れられない。彼女はラトミロフ將軍の夫人として社交界の華としての立場を維持し、リトヴィノフは彼女の真の愛情を受ける愛人として存在すれば良いというのだ。リトヴィノフはショックを受け、バーデン・バーデンを一人で去り故郷のロシアに戻る。

④ 三年後、リトヴィノフはロシアの父親の農場を再建させる。タチアナは依然独身で、それほど遠くないところに叔母と同居していた。リトヴィノフはタチアナを訪ね、真摯に赦しを乞い再び求婚する。タチアナはこれを受け

入れる。小説の最後にイリーナは相変わらず魅力的な社交界の華として君臨し、モスクワで若い崇拜者に囲まれ、ラトミロフ將軍は順調に出世コースを歩んでいることが付け加えられている。

『明暗』の津田と清子が滞在していた温泉宿は、迷路のような廊下と梯子段によって新館、別館、本館といった建物が連結され、温泉場も一つではない。もちろんカジノのような施設はないが、小さな温泉宿というものではなく、ヨーロッパの豪華なホテルを連想させる大型の温泉宿である。

『明暗』の展開がツルゲーネフの『煙』に倣った構想を漱石が抱いていたとすれば、どのような展開が考えられるだろうか。その場合、まず清子が津田を捨てて伴侶として選んだ関は、イリーナにとつてのラトミロフ將軍のように経済的あるいは社会階級において圧倒的に有利な立場であったという伏線が必要であったと思われる。しかしそのような伏線はみられない。清子は関が朝から晩まで忙しそうにして容易に休みも取れないと津田に告げている（百八十八章）。関はラトミロフのような特権階級に属してはいない普通の市民のようだ。

また『煙』を踏まえれば、津田と清子が、温泉地で再び恋愛関係に陥るのは必然になる。しかし、たとえその場限りであっても一度そのような関係が生じてしまうと、『明暗』は津田、お延あるいは清子の何れかが死を迎えるという悲劇にしなければならないように思える。ひとつの安全弁としては、津田が清子と関係を成就する前に疾疾が再発するという筋書きが考えられる。これは大量出血を伴った修善寺の大患（明治四十

三年)の時の漱石のようになることで、津田は死の境にさまようことになる。そしてその時、温泉地に駆け付けけるお延とは和解の可能性があるのではないか。

次にツルゲーネフの『煙』を原典とし、ヘンリー・ジェイムズが發展させた温泉保養地小説の新機軸を紹介したい。そしてそれらを勘案すると『明暗』にどのような結末が構想できたかを検討したい。

五、温泉保養地文学の進化形 (その一)

——ヘンリー・ジェイムズ『ユージン・ピッカリング』について——

アメリカ人作家ヘンリー・ジェイムズ(1843～1916)は多くの作品でヨーロッパに長期滞在するアメリカ人の有閑階級の人々を描いた。そのため、彼の小説には社交の場としての温泉保養地が多く登場する。ジェイムズはツルゲーネフを「作家のための作家」と形容し、大いに尊敬していたことで知られる。短篇『デ이지・ミラー』(1878)で主人公(アメリカ人男性)がヒロインのデ이지・ミラーと最初に出会うのはスイスの温泉保養地ヴェヴェイのホテルである。また長編小説『ロ德里ック・ハドソン』(1875)では彫刻家であるロ德里ックがバーデン・バーデンでギャンブルに耽溺し、多額の借金を背負う描写がある(第七章)。これが芸術家ロ德里ックの転落のきっかけになる。

そんなジェイムズがツルゲーネフの『煙』を原型とし、それを發展させた作品を執筆している。それは『ユージン・ピッカ

リング』(Eugene Pickering 1874)という短編小説である。

『ユージン・ピッカリング』の梗概を紹介しよう。

- ① 舞台は温泉保養地ホンブルクである。語り手である「私」(アメリカ人)は幼友達である(同じくアメリカ人の青年)ユージン・ピッカリングと再会する。ユージンは幼いころに母親を亡くしたが、過保護の父親によつて学校にはほとんど行かせてもらえず家庭教師による教育を受けた。しかし父親が死去したため、その遺産を相続したユージンは単身でヨーロッパ旅行をしているという。ただ父親は特異な遺言をユージンに残していた。それは父親のかつての商売相手(アメリカ人でトルコのスミルナ在住)の娘イザベル(ユージンより十歳年下)との親同士が決めた婚約である。ユージンとイザベルは一度も実際に出会ったことはない。ユージンはトルコに住むという従順そうな少女の小さな写真だけを所有している。しかし彼は父親の言いつけに背くことは考えてもいない。イザベルもユージンと同様に幼いころに母親を失くし、父親によつて深窓の令嬢として育てられたという。ユージンはイザベルは自分と同じ境遇であろうと想像している。ユージンのもとにはイザベルの父親から送られた未開封の手紙が一通あった。これはイザベルの父親が早くトルコに来て娘と結婚をするようにという催促の手紙であるとユージンは確信している。その手紙をユージンは開封することができない。それでしばらくの間、「私」に手紙を預かることを依頼する。

- ② 「私」はユージンがホンブルクのおペラハウスでブルメ

ンタール夫人というドイツ人の没落貴族の未亡人と一緒にいる所を目撃する。ブルメンタール夫人は美貌と教養を兼ね備え、ジョルジュ・サンド風の自作の小説を書くボヘミアンであった。しかし夫人は不幸な結婚の結果、実際は一文無しであった。しかしユージンは十歳以上年上のブルメンタール夫人に夢中になっている様子である。世間知らずで初めて恋に落ちたユージンが遺産目当てのブルメンタール夫人の餌食になるとホンブルクの社交界は噂した。

③

「私」はブルメンタール夫人にユージンには父親の決めた婚約者があることを告げる。その後ユージンは夫人に結婚を申し込む。三日後、夫人はユージンの求婚を受け入れる。しかしその直後、夫人は婚約を一方的に反故にする。ユージンがケルンまで追いかけてその理由を質すとブルメンタール夫人は、ユージンとの時間は楽しいこともあったが、正直死ぬほど退屈なこともあったと告げる。そしてお互いにとってより良い結婚相手がどこかにいることが確かであるので、結婚はできないと語る。

④

「私」とケルンで再会したユージンは婚約者の父親からの手紙をようやく開封する。それは予想に反して娘との結婚の催促ではなく、娘イザベルが父親同士が勝手に決めたという婚約はどうしても受け入れられないと言うので、父親はユージンとの婚約破棄を願う手紙であった。ユージンは落ち込むが、私とヨーロッパ周遊の旅を続けると徐々に元気を取り戻した。ヴェニスに着いてからユージンは一人でイザベルの住むトルコのスミルナを訪れ

る決心をする。半年後、私はユージンからイザベルは魅力的な女性だという便りを受け取った。ユージンとイザベルが恋に落ちたことが想像される。

ジェイムズの『ユージン・ピッカリング』はツルゲーネフの『煙』と同じ構想をたどりながら、後半③④に二つのジェイムズのなどんでん返しがある。

一つ目はブルメンタール夫人の良心である。夫人は、世間知らずのユージンに比べると色事に関してはかにかに経験豊富な年上の女性である。夫人がその気になれば初心なユージンを名前だけの結婚に誘い込み、財産を巻き上げてしまうことなど容易であつたろう。夫人は『煙』のイリーナのように男の欲望の対象となり、男の運命を狂わす女性にしか見えなかった。しかし、実のところブルメンタール夫人は長い目で見たユージンの幸福を考える思慮深い人物であつた。

二つ目はユージンのまだ見ぬ婚約者イザベルである。ユージンが、過保護に育てられて父親の指示に逆らうことなどできない弱い人物と信じていた少女である。しかし彼女は父親に無条件で結婚相手を選択することを委ねる消極的な女性ではなかった。

ジェイムズがツルゲーネフの『煙』から享受し発展させたのは、バーデン・バーデンのような温泉保養地文学での女性の役割である。保養地のアヴァンチュールの対象としてしか見られていなかった女性をジェイムズは否定し、男性の性的対象ではない自分の意志を持った女性像をジェイムズは保養地文学において創造したと評価されている。

六・温泉保養地文学の進化形（その二）

——ヘンリー・ジェイムズ『コンフィデンス』について——

そしてさらにジェイムズは『コンフィデンス』（Confidence 1879）というバーデン・バーデンを主たる舞台にした長編小説を執筆している。これは『煙』『ユージン・ピッカリング』の系譜につながる作品といえる。そしてジェイムズは『ユージン・ピッカリング』で創造した女性像を『コンフィデンス』に生かしている。これはジェイムズによる温泉保養地文学のひとつの完成形であった。

『コンフィデンス』の梗概を紹介しよう。

① 主要な登場人物はヨーロッパに滞在する有閑階級に属するアメリカ人二組の男女である。男性はバーナード（画家）とゴードン（科学者）で女性アンジェラとブランチである。小説の語り手の視点にはバーナードに固定されている。序章でイタリアのシエナでスケッチをしていたバーナードはアンジェラとその母親に遭遇する。実はその時バーナードとアンジェラはお互いに恋に落ちていたのだが、バーナードは気づかないで別れる。

② バーデン・バーデンでバーナードは親友のゴードンからある女性に恋に落ちたと告げられる。その女性とはバーナードがシエナで出会ったアンジェラであった。そしてゴードンは（科学者らしく）バーナードにアンジェラの

人格を観察し、ロンドンに移動した自分に報告してほしいと要請する。バーナードは自分が明らかにアンジェラに対して知的、文化的に優位に立つものとしてアンジェラと時間を過ごす。そしてアンジェラは辻褃の合わない発言をしたり、バーナードに秋波を送ったりと奇矯な行動をみせる。このためバーナードはゴードンにアンジェラに関して否定的な報告を送る。これを受けてゴードンはアンジェラとの結婚をあきらめ、ブランチと結婚する。バーナードはフランス北東部の海岸でアンジェラとその母親に再会する。その時はつきりと自分はアンジェラを恋していたことを悟る。そしてアンジェラはバーナードが報告をした後、ゴードンから求婚を受けたことを告白する。もちろんアンジェラはバーナードを愛しているのでものを拒絶したという。そのうえバーナードがゴードンに自分との結婚をあきらめるような報告をさせるように自分を偽ったと告白する。バーナードは自分がアンジェラに優位な立場で観察していたと思っていたが、実はアンジェラがバーナードを操っていたのだ。その後、相思相愛のバーナードとアンジェラは結婚した。

④ ゴードンとブランチの結婚生活は上手くいっていない。その理由はゴードンが親友バーナードは自分自身がアンジェラと結婚するために嘘の報告をバーデン・バーデンから送ったと疑っていたことにあった。ゴードンはアンジェラに未練を持っていた。それがブランチとの結婚生活に悪い影響を与えていた。アンジェラはバリに滞在していたゴードンに二人だけで談話する機会を設け、ゴ

ドンにはそれと悟られないように「心理カウンセリング」を行う。このアンジェラとの対話を通じて、ゴードンは本当の自分の気持ちを発見していく。浮気をしていると疑っていた妻ブランチは夫ゴードンの関心を引くためのポーズであること、そしてゴードンも自分が本当に愛しているのはブランチであることを認識する。こうして二組の夫婦が円満となり小説は終わる。

『コンフィデンス』におけるジェイムズのどんでん返しは、男性から観察され、欲望の対象として見られていた女性（アンジェラ）が、実は男性（バーナードとゴードン）を出し抜いて物語を牽引していたということである。

漱石がジェイムズの温泉保養地文学にどの程度親しんでいたのかについての情報はない。しかし漱石とジェイムズは同時代の作家として、同じ温泉保養地文学の「進化形」を着想していた可能性は少なくないのではないかと筆者は考える。『明暗』はそれまでの漱石作品とは異なり、主要な登場人物（津田、お延）の視点からの語りを導入している。この語りのスタイルはジェイムズからの影響を強く感じさせる。

七．おわりに

最後に改めて未完の『明暗』の結末を推測してみたい。

清子が理由も告げず津田を去り関に嫁いだのは、『三四郎』（1908）において美禰子が三四郎を突然捨てて銀行員と結婚したことを思い起こさせる。『三四郎』の美禰子はこの行動を三

四郎に説明することなく謎のまま小説は終える。

『明暗』の清子の場合、津田と別れたのは、手前勝手のようにみえて吉川夫人にだけは言いなりになるという津田の性格に嫌気がさしたということが考えられよう。津田が最も心を通わせている女性はお延でもなく清子でもなく、年上の吉川夫人であったようだ。吉川夫人に勧められれば津田はお延を裏切つてまで温泉地に向かう。

そして温泉旅館で津田と清子は再会した。清子が当初驚く仕草を見せたのは津田が自分の意志で清子に会いに来たのではないかと一瞬、虚をつかれたためではなかったか。翌日、清子が落ち着きを取り戻したのは、やはり津田は吉川夫人の指図で現れたことが分かったという説明が可能である。

吉川夫人は津田に、清子との温泉保養地のアワンチュウルを勧めたのであろうか。お延を嫁として津田に紹介したのも吉川夫人であったのに、はたしてそこまで悪魔的な行動をとるだろうか。むしろ吉川夫人は言葉の通りに清子が津田を「療治」することを期待していたのではないだろうか。

津田と温泉旅館で最初に再会した夜に、清子は吉川夫人から「療治」の依頼を受け取った可能性がある。ジェイムズの『コンフィデンス』におけるゴードンに対するアンジェラ嬢の役割である。『明暗』（二）で津田はポアンカレの偶然の概念を持ち出して、清子ではなくお延と結婚したという理由が分からないと自問している。そんな津田を清子は、ウェイクフィールドの牧師プリムローズ博士のように、お延と結ばれた縁を大切にすることを説得しなければいけない。それは津田に自分が「弱いエゴイスト」であるということを自覚させることから出発す

るのに違いがないが、簡単な事とは思えない。しかも清子が突然『コンフィデンス』のアンジェラ嬢のような才女ぶりを発揮して、津田に結婚カウンセリングをするのは不自然に思える。清子の名前が小説の中で初めて言及されるのが、後半部の百三十七章で、さらに実際に小説に登場するのは百七十六章である。終盤にさしかかった『明暗』にアンジェラ嬢のような役割を託すのは、津田が変わるためのきっかけとしてはそれだけでは弱いように思える。やはり津田は温泉地で痔疾の再発という(漱石の修善寺の大患を思い起こさせる)肉体的痛手を蒙るのではないか。その結果、温泉宿に駆け付けたお延との和解の可能性が示唆されて『明暗』は終焉を迎えることを漱石は構想していたのではないだろうか。

〔注〕

- (一)『虞美人草』とメレディスの『エゴイスト』に関しては拙稿「漱石『虞美人草』(十八)におけるメレディスの引用について」『漱石に英文学を読む』晃洋書房 2017 所収 を参照されたし。

- (二) Through very love of self himself he slew.
Let it be admitted for his epitaph.

- (三) To the happy few 「幸福なる少数の読者のために」としてスタンダールが『バルムの僧院』(1838)の最終行に英文で引用したことで知られている。

- (四)「温泉保養地文学」は英米では Waterring place narrative または

European Spa literature と呼ばれている。

- (五)『倫敦消息〔ボトトギス所収〕』(1901)

〔参考文献〕

- 浦西和彦編著、『温泉文学事典』和泉書院 2016
Ivan Turgenev, 『煙』Smoke: Translated from Russian by Constance Garnet, London 1896
Henry James, Eugene Pickering: The Novels of Henry James XXIV, London 1924
Henry James, Confidence: The Novels of Henry James IV, London 1921
水野尚之訳、ヘンリー・ジェイムズ著『信頼』(Confidence) 英宝社 2013
George Meredith, The Egoist, London 1968
Oliver Goldsmith, The Vicar of Wakefield, London 1986
森鷗外、『藤柄絵』鷗外全集著作篇第四卷 岩波書店 1951
夏目漱石、『明暗』漱石全集第十一卷 岩波書店 1994
夏目漱石、『倫敦消息』『ボトトギス』所収』『手紙』漱石全集第十一卷 岩波書店 1994
夏目漱石、『日記・断片 下』漱石全集第二十卷 岩波書店 1996
Marcel Prévost, 『不在』L'Absence/Féminités, Paris 1910
Guy de Maupassant, 『(私の)二十五日間』Mes vingt-cinq jours, Toine Paris 1885

(おがはら としお・京都女子大学文学部非常勤講師)